

酒

実は堺は江戸時代から昭和初期まで酒造りが盛んで、
明治期には堺ではトップクラスの産業でした。
その栄枯盛衰の歴史をたどってみましょう。

室町時代(1336年～)

応仁・文明の乱(1467～1477年)

応仁の乱で、京都が戦場になり都市機能を失いました。また、それまで遣明船(けんみんせん)の発着港であった兵庫津が西軍に占領されたため、堺津(さかいづ)が遣明船の発着港となり、国際貿易の起点になったのです。その後、南蛮貿易(なんばんぼうえき)により、様々な商品が取引され各種産業が堺を中心に発展してゆくことになります。

この影響で、京都で隆盛を誇っていた酒造りも大きな打撃を受けることになります。乱を避けて堺へ移った酒造技術者もいたことから、堺の酒造りが盛んになりました。

また、このころに、大容量の木樽が開発され、大量運搬が可能になって酒造が大いに発展しました。堺で作られた「堺樽」が評判を得て、以降堺の酒造は江戸時代まで続くことになります。

江戸時代(1603年～)

江戸時代には、堺は伊丹、池田、西宮などに並び、酒造業が隆盛を誇ります。元禄8年(1695)に酒屋109家、酒造高6430石程との記録も残っています。

明治

明治時代には、堺の主要製造業の出荷額において、清酒はトップの額を誇るほどの主要産業に成長していました。

明治12年(1879)には、鳥井駒吉(とりいこまきち)が堺酒造組合を設立、同20年には大阪麦酒会社(のちのアサヒビール)を起業しました。翌21年にはスペイン・バルセロナ万博に堺詰酒(びんづめしゅ)を出品するなどの功績も残っています。



米谷甚三郎が販売した「八千世」の引札(年不詳、明治時代か)
:写真提供/堺市博物館



鳥井合名会社が世に出した
初めての堺詰酒「春駒」
:写真提供/堺市博物館

昭和初期

良質な水の不足、堺の市街地化における土地確保の難しさなどから、堺の醸造家の多くは灘に進出することになってしまい、堺の酒造業は衰退の道をたどります。



戦前までは堺で醸造されていた清酒、金露・都菊・菊泉の名が記された看板。戦後は灘に移転した。年不詳
:写真提供/堺市博物館

昭和後期

昭和47年(1972)、遂に堺の酒蔵が姿を消してしまいました。

ただ、酒造道具は引き続き生産され、2000年代初めには、日本で唯一となった醸造用の大桶を作る技術を持つ会社が2020年ごろまで製造を続けていました。

現在

平成26年(2014)、明治期に堺を支えた酒造業の復活を目指して立ち上げられた「利体蔵」が清酒製造を開始し、翌年、40年以上の空白期間を経て、堺生まれの清酒「千利休」が誕生しました。



千利休の名を冠した堺生まれの日本酒
:写真提供/利体蔵